

伊東正義氏（第二次大平内閣官房長官）に聞く

四十日抗争

―聞き手・読売新聞政治部



内閣記者会と官邸チームとのソフトボール試合で、バッテリーを組んだ大平投手（中央）と伊東正義捕手（左端）が味方の攻撃を観戦（1980年3月29日）

四十日抗争勃発時の心境

——大平（正芳）さんは、昭和五十四年十月に解散・総選挙を断行したわけですが、そのときはどんな気持ちだったのですか。

伊東 大平君はあの選挙の時、非常に気負っていたね。党内に足を引つ張る奴がいて、それに対する「何くそ」という気負いがあった。オレは、「もう少し党内融和を考えた方がいい」といったことがあるんだが、大平君は「一回選挙を戦ってから、それからよく考えるんだ」といったね。総裁予備選挙で福田さん（起夫）に勝ったことから、党内に怨念が渦巻いていて、それが尾を引いていた。それに、与野党伯仲で、予算委員会をやれば、なかなかスツとうまくいかないこともあった。大平君としては、「解散して、ちゃんとしたい」という気持ちもあつたんだ。だが、結果的にあんなつて、それでまあ、四十日抗争になるわけだけども……。

——選挙に敗北した結果、責任問題をめぐっていわゆる四十日抗争といわれる党内抗争が起きましたが、大平さんはあの当時、どんな理由から辞任を拒否したのですか。

伊東 大平君としては、「ここで政権を投げ出して、党内を混乱させることは、やっぱり国の政治を考えたらずいじゃないか。いろんなことをいわれるけれど、オレが收拾する責任がある」という気持ちがとても強かったな。辞めることは責任回避になると思っていたわけで、首相の地位に恋々とするということはなかった。

——四十日抗争の過程ではいろんな動きがあつたようですが、大平さんに動揺

はなかったのですか。首相指名選挙で自民党内から二人立つという異常事態になりましたが、予想されたことだったのですか。

伊東 いろいろなことがあったね。いろいろな人が来て、いろいろなことをいったよ。一つはねえ、五十五年一月の党大会まで総理・総裁を続け、そこで改めて考えたらどうかという収拾案に乗りかけたことがあった。そういうことを彼はちょっと考えたことがあったが、「それでは期限付きで、総理としての仕事は何もできない」ということで、踏みとどまった。大平君が相談に来て、一回乗りかけたんだが、「そんなことまでして、総理・総裁をやるべきじゃない」と思い直したんだ。それで福田さんと二人で話し合ったのだが、福田さんがあれまで強い辞任要求をやられるという感じは持っていなかったんだ。同じ党から二人出て、首相指名選挙²で、総理を争うのは、醜態中の醜態という気持ちを持ったよ。大平君は「(福田さんらも)党を分裂させてまで、という自信はないんじゃないか。まさかそこまでは考えておられんだろう」といつていたけど……。

新自ク四票に安心感

——首相指名選挙の結果、新自由クラブの四票も得て大平さんが再選されたわけですが、新自クの支持取り付けに当たっては連立を想定しておられたのですか。

伊東 (首相指名選挙の)票読みをやりながら、大平君は、「新自クとは元々同根なんだし、だんだん価値観も多様化してきて、これからは小党分立になるかも知れんな」ということは頭にあった。

実ただ、連立は新自クまでで、公明党や民社党との連立までは全然考えていなかった。新自クとの連立は考えていたよ。うちでは、六ちゃん（田中六助）と佐々木（義武）がおもに新自クと話し合っている。政策のことも話したよ。政策協定もあつた。組閣本部で、大平君が「田川（誠一）君を文部大臣にしたい」と提案したんだが、結局、実現せず、あとでオレがあやまりに歩いたんだ。あの四票がなくても恐らく勝つたが、安心感を持つには大切な票だったな。

——四十日抗争後の内閣改造の際、二階堂進さん（のち副総裁）の三役起用問題でもめましたが大平さんと田中さん（角栄、元首相）との関係はどうだったのですか。

伊東 それはねえ、大平君が航空機疑惑調査のための委員会を作ったけど、彼は政治倫理に対して一つの考え方を持っていたわけだ。オレが官房長官になった時、田中（角栄）さんから電話で「二階堂を三役に使ってくれ」と、強硬に大平君にいつてきた。それで大平君に伝えたら、大平君は「そういうことは総理・総裁が考えることだ。そんなことをいつてもらつては困る」といい、オレから断りの返事をした。結局、大平君は死ぬまで二階堂さんを使わなかった。

しこり残つて不信任

——四十日抗争から半年後、今度は大平内閣は、野党が提出した内閣不信任案に自民党の反主流派が欠席戦術をとつて同調したことで可決される事態に見舞われました。この時の大平さんの気持ちはどんな様子でした。ある程度、予想していたのですか。

伊東 いやあねえ、まさか不信任案が通るとは……。オレはいろんな人に聞いて歩いたんだが、負けるという人はだれもいなかったね。「だいじょうぶだ。本会議のペルを押しもらってもかまわない」というのばかりだった。大平君も「よもや」と思っていたらう。衆院本会議場のヒナ壇にいた時、加藤君（紘一、当時官房副長官）が、金丸さん（信、当時国対委員長）の書いた「休憩にするか、どうか」というメモを持ってきてね。その時は、桜内さん（義雄、当時幹事長）が、反主流派議員を呼び出しに行っていて、まだ帰っていない間だった。大平君のところへそのメモを持っていったら、「（議事を）続ける。負けてもいいから続ける。休憩したら混乱になって、もう二度と本会議が開けなくなるんじゃないか。負けてもいいからやれ」といってね。今度は、桜内さんが「（説得したが）ダメだった」と、本会議場に入ってきた。こりゃあいかんとわかってから、大平君はオレに対して、「本会議が終わったらすぐに閣僚を集める。そこで解散を決めるから」といい、自分一人で解散を決意したんだ。いやあ、今でも一人一人の顔を思い出すよ。みんなイライラしていたな。桜内さんが一人で入って来た時は、もうあきらめたよ。そのとき、本会議に入る前だったが、田中（角栄）さんから電話がかかってくるね、大平君に「お前、出る」といわれて出ると、「桜内はどういう返事を（反主流派に）持っていったんだ。そんな弱気を出しちゃダメだ。しっかりがんばってくれ」といわれたなあ。

——不信任案可決を受けての解散、参院選とのダブル選挙は初めから予定していたのではないのですか。田中さんと打ち合わせ済みだったという話もありましたが。

伊東 いや、いや、それはどうかなあ。そんなねえ、大平君は負けるとは思っていなかったと思う

実よ。大平君は、オレらにも相談も何もなく解散を決めたよ。不信任案可決後の閣議の時に、衆参同時選挙がやれるかどうか、後藤田君（正晴、当時自治相）にオレが確かめたことがあるんだ。後藤田君は、「事務局はできないといってているが、総理がやれというならやるよ」といったんだ。最初から負けるとわかっていたという話はできすぎだ。（反主流派議員が）入ってこない中で、不信任案の投票のためヒナ壇から下へ降りていく前だよ、負けるとわかったのは。大平君は何もいわなかったけどねえ、腹の中は煮えくりかえる思いだっただろう。

——その後、一時は、反主流派が分裂選挙も辞さずという構えになり、選挙の公認問題がもめましたね。大平さんの気持ちは、本当のところはどうだったのですか。

伊東 公認問題でゴタゴタした時、彼は、本会議に出なかつた人は、本当は公認したくなかつたんだ。ところがね、オレの了解では、選挙資金を世話する方（財界の意）がいつてきたんだ。「（分裂を避け、党が一本化する）そういうことでなけりや金は出さない」とね。彼はくやししい顔をしていたもん。彼は公認をやりたくなかつたど、オレはそうみている。しかし、公認を出さないと（選挙資金も）すんなりとはいひなかつた。

体に自信あつたが

——選挙戦がスタートした日に大平さんは倒れてしまった。あの当時、大平さんに心臓病の持病があることを知らなかつたのですか。死ぬなんて事態になるとは予想もしていなかつたのでしょうか……。

伊東 健康状態はねえ、われわれもあとになって申しわけないと思ってるんだ。彼はログセのよ
うに、「オレは頭は悪いけど、体はだいたいじょうぶだ」といってたので、われわれも「そうだ、そうだ」
といってたんだよ。死ぬなんて、そんなことは夢にも思わなかった。糖尿病があるのは知っていた
んだが……。死んだのは党内抗争の犠牲になったんだよ。一番の原因は、気苦労だと思うな。

——大平さんが入院中の時の様子はどうだったのですか。病床では何を考えていたのですか。政治
家の人物月旦（批評）をやっていたそうですが。

伊東 大平君は、あるいはベネチア・サミット（先進国首脳会議）へ行けるかも知れんと考えてい
た。亡くなる前の日には、奥さんに、「買い物をしておけ」といったんだ。オレも浅はかなんだな、
こっちもカッパしているもんだから、何とか、できればサミットへ行けるのではといういちの望み
があったのは確かなんだ。とても、病状が悪いから総理を辞めてゆっくり静養を、なんていう気持ち
には全然ならなかった。総理を辞めていたらあんなことにならなかったかも……。六ちゃんなんか、
医者とけんかしてまでサミットへ行かせようとしていた。しろつと考えの浅はかさなんだなあ。病床
で、大平君がえらく怒ったことをよく覚えてる。鈴木さん（善幸、当時総務会長）が、大平君の後
（引退後）のことに言及したからだ。「オレのことをそう思っているのか。何だ、あれは」とね。人物
月旦はいろいろやったよ。「治ったら、中曽根君（康弘、のち首相）は重用せにゃいかな」とか、
河本さん（敏夫、元政調会長）はどうとか。余り言うとう具合が悪いから言わんが。大平君は、オレの
健康のことに気遣ってくれてね、「お前、隣のベッドで少し休んでから帰れよ」と、よくいってくれ
た。

実 大平さんが亡くなる前に報道陣に写真を撮らせましたが、あれは演出ではなかったのですか。
就 遺書はあったのですか。死去直後、伊東さんは何を考えましたか。

華 伊東 いや、いや、あれ(写真)はそのままよ。大平君はやつれていないわけだよ。亡くなった時も、やつれて病人らしいということはなかったんだ。(遺書の件など)その辺のことは、しゃべらんことにしている。大平君が死んだ後、すぐそのことを発表し、ベネチア・サミットには、大来(佐武郎、当時外相)、佐々木(義武、当時通産相)、竹下(登、当時蔵相)の三人が代表で行くと、ピシッといってしまったんだ。偉い人が「オレが代わりに行ってもいいよ」といって来たりしていたもんだから、そんなことやっちゃんかんと思ってたね。

——大平さんは、世代交代についてどんな考えを持っていたのですか。いわゆるニューリーダーに対してはどうでしたか。

伊東 あのねえ、大平君が総理になった時に、オレはいつてやつたんだ。「もうトップになったのだから、自分が辞めた後のことを考えなきゃいかん」とね。大平君の奥さんは変な顔をしたが……。大平君は、「伊東、それはわかるが、一回、選挙をやるまで待て。そのあとで気持ちを決めるから、それまで待て」といったな。その後、二人でそのことを話す機会はなかった。ただね、はつきりとはいわなかったが、河本さんを相当重用しようという考えがあったのは確かだ。中曽根さんについては、「不信任案の時、本会議場に出て(出席して)きたのは、あれは政党人としての節でないか」というていた。ニューリーダーはだれがいいとか、世代交代とかまでは言及していなかった。

——大平さんの死後、後継者をだれにするかで、自民党内にいろんな動きがありました。実際の

ところはどうだったのですか。

伊東 西村栄一さん（当時、副総裁）は、「河本さんでどうだ」と、二度、いつてこられた。だから、田中派の中でも河本さんを後継に、という動きがあったのに違いない。その河本さんがならなかった一番大きな理由は、やはり不信任案の時、本会議場に入ってこなかったことだと思う。中曽根さんは、首相臨時代理のオレのところへおくやみをいいながら来られて、「宏池会は後継者をどうするのか」と探りに来た。

——あの当時、伊東さん自身が暫定政権を担当するのではないかという話もありましたね。結果的には、同じ派閥の宏池会から、鈴木さんが後継者になったわけですが、そこにゆくまでの真相はどうだったのですか。

伊東 個人個人でいつてくる人はあつたけど、オレのことはそんなに大きな話になっていなかったのじゃないかな。オレの気持ちとしては、大平君の葬式をキチンと出して、きれいに大平内閣の幕引きをしようということが一〇〇%頭の中にあつただけで、真正正銘、全然乗らなかつた。葬式を出すまでは喪に服そうということだったし。鈴木さんが後継者になつたいきさつについては、オレもよく知らんが、一番動いたのは六ちゃんだ。しかし、六ちゃんも最初は（意中の人物は）鈴木さんではなかつたんだ、本当は。いつの間にかそういうことになった。鈴木さんが一番、抵抗がなかつたんだろ。それ以上、今は何もいいたくない。

——今から大平内閣を振り返ってみると、大平さんが残したものは何だと思えますか。

伊東 国際的なものでは、やっぱり、西側の一員という態度をはっきり出したことだろうな。イラ

去 華 就 実

ソンの人質事件やソ連のアフガニスタン侵攻事件があつたりした。その後の内閣でもこの路線をずっと歩いており、国際的な評価を受けることだと思つてゐる。国内的には、政策の力は及ばなかつたが、行政改革で特殊法人の整理をしようとか、そういうようなことは後に引き継がれている。また、環太平洋といった考え方とか、地方の時代とか、いろんな提言をしたが、これからの政策のどこかに生きてくるのではないかな。中曽根さんも、大平さんのブレーンを使つてうまくやつてゐるし……。大平君は、一番人と争ふことの嫌いな性格だつたよ。それがあゝなつて死んだのは皮肉だな。大平君の死んだ瞬間の顔を見て、これで彼は争いのない世界に行くんだなあ、と思つたよ。大平君は、病床で、「退院したら、自分がどうなるなんてことは、伊東、第二次に考えてくれ。選挙の結果、どうやつたら政局を安定できるか、それを第一に考えてくれ」と、政局の安定、そればかりを言つていた。ポストがどうこうということでなく、責任を感じて、何としても自分がやらねばまずいということだつた。彼は、自分の死で、自民党を安定にしたようなもんだな。

〔脚注〕

(1) 五十三年の総裁予備選挙「開かれた総裁選挙」をスローガンに、投票権を党員、党友に拡大し、郵便投票で本選挙に臨む上位二人を選ぶことにした。このときは、党員、党友千票につき一点の持ち点制が採用され、大平氏は七百四十八点、福田氏六百三十八点、中曽根康弘氏九十三点、河本敏夫氏四十六点の順だつた。福田氏が「天の声には、ときには変な声もある」のセリフを残して本選挙出馬を辞退したことにより、大平氏が五十三年十二月一日の臨時党大会で新総裁に選出された。

(2) 首相指名選挙 五十四年十一月六日の衆院本会議での首相指名投票の結果は、大平氏百三十五票、福田氏百二十五票で、その差わずか十票。大平氏の得票の中には、新自クの四票が加わつてゐた。有効投票

四十日抗争

の過半数に達しなかつたため、決選投票が行われ、大平氏百三十八票、福田氏百二十一票で、大平氏が勝利した。この間、両陣営は激しい票争奪戦を演じただけでなく、中道野党工作も行われ、事実上の党分裂状態となつた。

(3) 航空機疑惑 田中角栄元首相の逮捕にまで発展した五十一年二月のロッキード事件に続き、五十四年一月には、今度はグラマン、ダグラス社の日本への航空機売り込みに関する裏工作が表面化、衆院予算委員会を舞台に、疑惑の対象となつた松野頼三氏(元防衛庁長官)や海部八郎氏(当時日商岩井副社長)らの証人喚問が行われるなど、航空機疑惑をめぐる野党攻防が再燃した。

(4) 分裂選挙 五十五年五月十六日の内閣不信任案をめぐる投票に対し、反主流派の福田、三木、中川の三派、および一部中曽根派の計六十九人が欠席、このため、賛成二百四十三票、反対百八十七票の大差で可決された。反主流派は「自民党再生協議会」を結成して主流派に対抗、公認問題をめぐり確執から、一時は胸に白バラをつけて独自に選挙戦を戦い抜き、選挙後は新党を結成することまで検討した。しかし、主流派が、財界の圧力もあつて欠席組も党公認とすることになり、分裂の危機はドタン場で回避された。

(このインタビューは、昭和六〇年一月、読売新聞社が刊行した読売新聞政治部編「権力の中樞が語る自民党の三十年」から、伊東輝子夫人、読売新聞社出版局のご承諾を得て転載したものです)

伊東正義(いとう まさよし) 一九一三年、福島県生まれ。東大法学部卒、

農林事務次官をへて、六三年衆議院議員に初当選、以後八回当選。七九年第二次

大平内閣の官房長官として初入閣、翌年六月大平首相急死のあと首相臨時代理、

鈴木内閣の外相を務めた後、自民党政務調査会長、総務会長などの要職を歴任。

また日中友好議員連盟会長、党政治改革推進本部長として、日中友好、政治改革に尽力。「伊東の趣味は大平」と言われたほどの親友で、大平正芳記念財団の発

足当初からの理事。九四年死去。